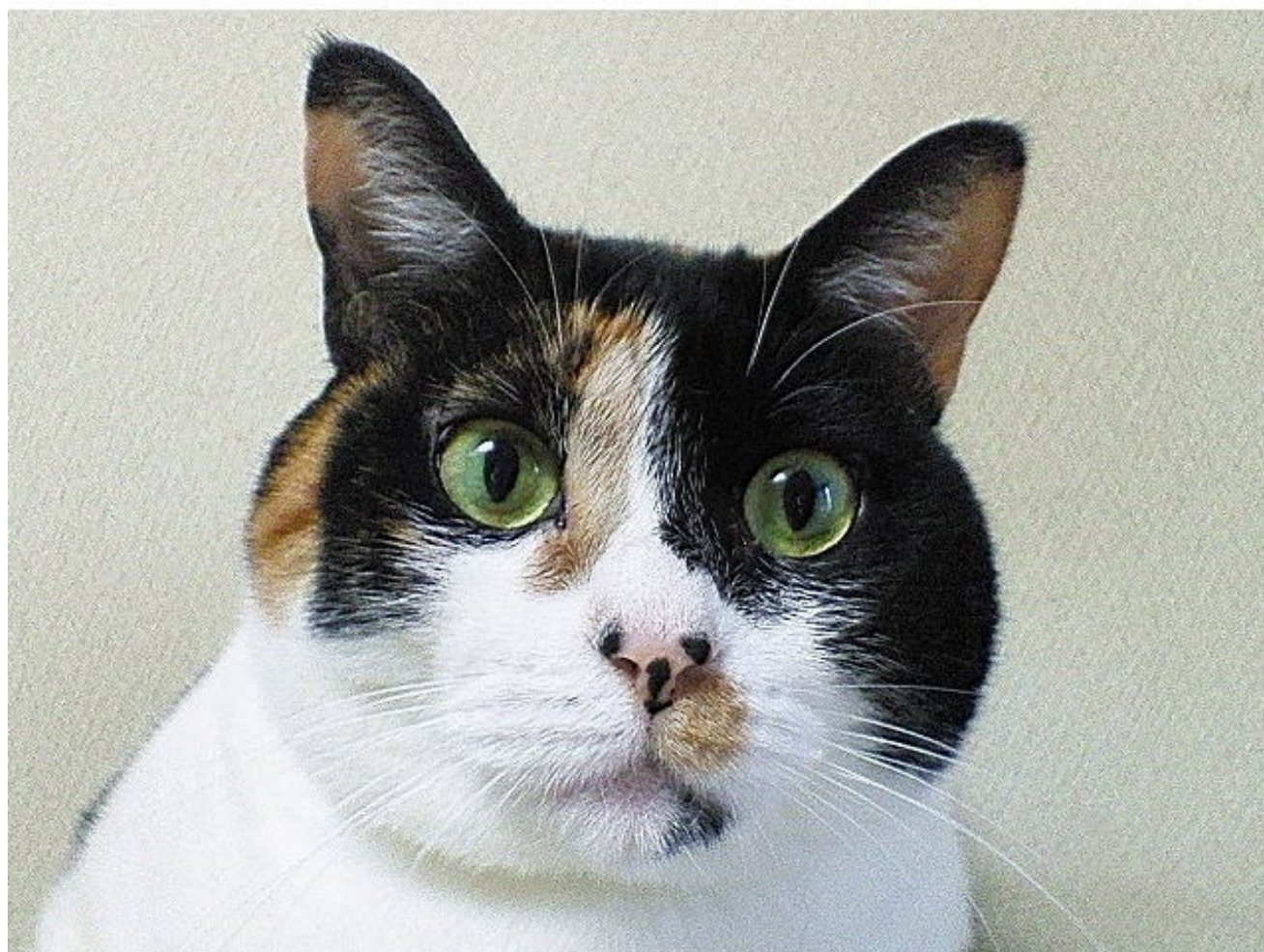


二十分の一の猫





よく鳴く仔猫だった。

今でも基本の鳴き声が実に甘え声である。

甘えた声で少しでも相手をしてくれた人を追う。

抱き上げれば降りようとしない。

夕暮れの近くなった彼岸花を見に行っただけの場所で

私は飛鳥を拉致した。

山の暗闇の中

小さな仔猫が最後の観光客を見送る姿を想像して

いつまでも泣いている姿を想像して

私は20匹目として連れ帰ってしまったのだ。



携帯電話のカメラにて撮影
レンズを顔に触れる距離まで接近しても
あまり気にしないのが飛鳥である。



だいたい眠いときというのは周囲を気にしない夕子で
いわゆる猫らしいツンデレの切り替えが激しい猫だ。
鼻のピンクと黒の模様が特徴.....かもしれない。



実は我が家の猫で犬が苦手な猫は飛鳥だけである。

一緒に寝ているのは10歳を迎えて皮膚病に悩む愛犬の1匹だが
彼女は猫に囲まれて育ったので犬というより猫に近い行動を取る。

何より、あらゆることに無関心な犬なので

主に飛鳥の遊び相手.....というより単に暖を取るための手段のようだ。



もう充分、成猫であるが未っ子であることは変わらない。
この子を拾ったとき石舞台の管理人さんに聞いた話によれば
純粋な山育ちの野良の子の様だ。



人懐こく、いきなり膝の上に乗ってきて
あげく広げて見せたミニボストンバッグの中に自ら入ってしまった。
「いいんだね？」と何度も訊ねて拉致してきた。
(元気なのだから「保護」ではなく「拉致」だと思っている)
ただし帰りの車中は暴れ周り
窓の外に見える散歩中の犬に怯えて
「シャー！」と威嚇していたのは覚えている。



我が家には安物ではあるが何本か常に首輪の予備がある。

現在も付け続けている青い首輪は

我が家にやってきた日に付けたものだ。

普通、猫というのは首輪を嫌がったり

気にして取ろうと暴れるものなのだが

飛鳥は全く気にせず受け入れた。

猫としては大雑把なのかもしれない。



私は病気の仔猫を育ててきたせいか
ヤンチャで暴れん坊の猫が好きなようだ。
飛鳥は病気で保護したのではないので
やってきた日から暴れ周り
現在も小心者のくせに御転婆である。



飛鳥は「狩り」をする。

我が家で「狩り」をするのは他にもいるが

あちらは飛んでいる蚊を一瞬で落とす。

飛鳥にそんな技術は無い。

ただ何時間でも、何日でも、待ち続け

隠れた獲物を逃すことなく捕獲する。

.....失くしたと思っていた黒い靴下の片方を

数時間かけて捕獲して自慢げに持ってきたときは

呆れるより、その無意味な慎重さを誉めた。



人に対しては愛嬌をふりまくくせに
飛鳥は他の猫と接する事が苦手である。
犬に至っては先の白いペキニーズだけで
他の犬は遠く、高い場所から威嚇の声をあげる。
我が家の犬猫は、基本的に集団に慣れているので
威嚇などしなければ遊び相手になってくれるはずなのだが
長年過ごして、しっかりイジメられっ子の位置を築いた。



飛鳥は基本的に「かまってちゃん」である。

ただし猫らしく気が乗らないときは

邪魔臭そうに逃げていく。

.....少し手を伸ばせば届く位置に.....



どんな両親なのか知らないが
三毛の中でもキツイ印象を受ける柄の入り方だと思う。
面構えに反して性格は小心者だが
決して大人しい猫ではないし
しなくてもいいことをするのが大好きなようだ。
飛鳥による破壊は家族の誰も気にしない。

油断？



この寝ている場所は古いモニターの上なのだが
よく熟睡して落ちるということをやる。
猫なのだから素直に落ちるのではなく
周囲にしがみ付こうと爪を、手足を動かし
あげく背中から無様に落ちる。
何度やっても学習できないらしい。



昔は浴槽を覗くのが好きだった。
ある日、床がびしょぬれで
点々と猫の足跡が付いていた。
仔猫がいるときは決して残り湯を置かないが
（過去に転落して溺れた子が居る）
そのときの飛鳥は成猫だった。
おかげで大事には至らなかったが
飛鳥は浴槽の淵に座るということをしなくなった。



どうしても落ちている生き物を持ち帰る悪癖があるので
「保護」ではなく「拉致」をしてきた飛鳥を規準に定めた。

- * 近寄れば自ら膝の上に乗ってきて腹を見せる。
- * バッグを開けて見せたら自ら入る。
- * 締め切られても10分は大人しくしている。

これを1つでもクリアしなければ
私は野良として生きていけばいいのだと
自己満足でしかない建前上の「保護」をやめた。
病魔に冒された子を生かし続けて
苦しみながら早世するのを見続けて
私の自粛は飛鳥が基準になっている。

目の色



猫の目の色というのは光の入り方によって変わる。

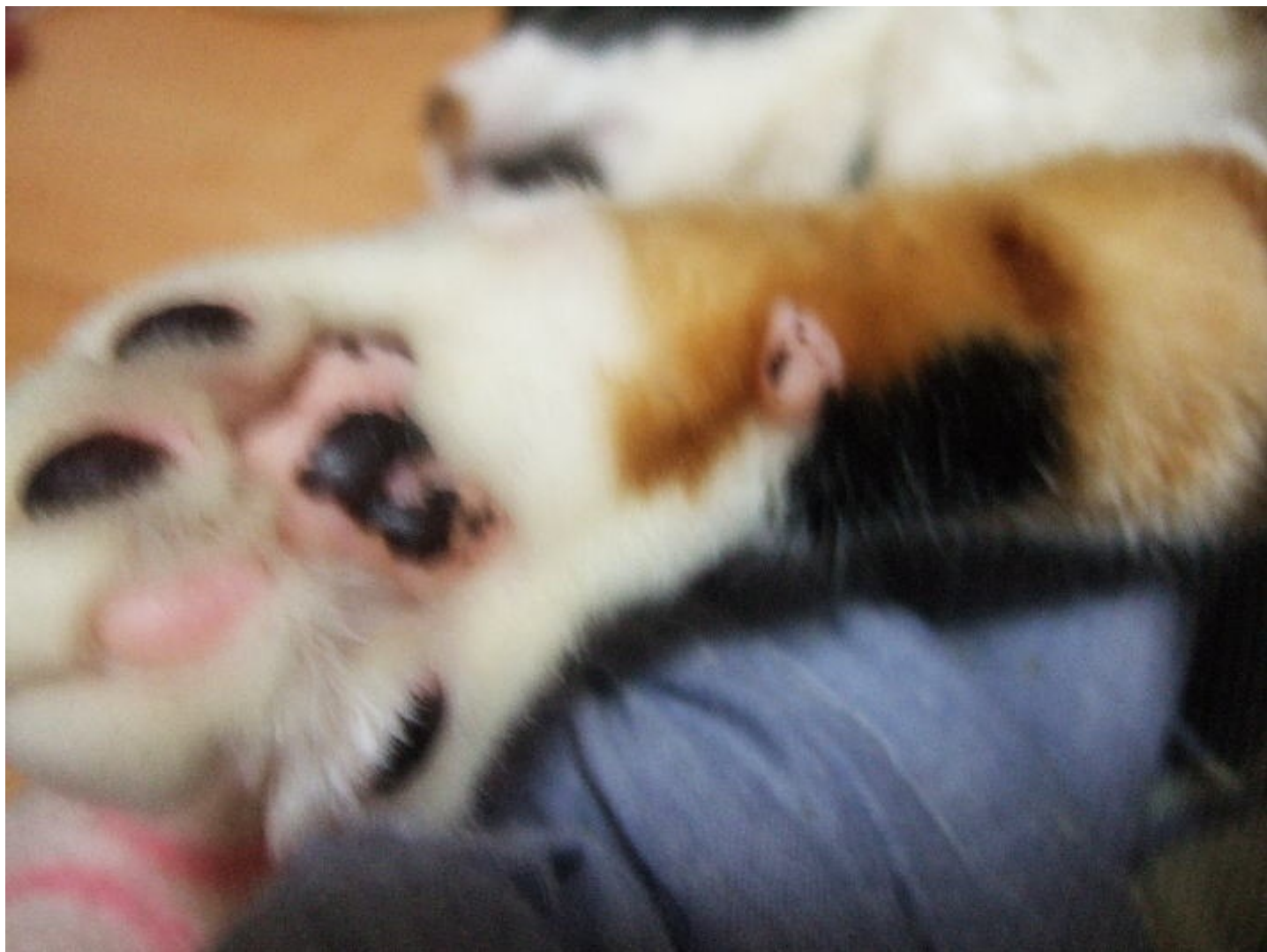
飛鳥は黄色のような深い緑だが
ときおり猫らしく金の色をして光る。

ドングリ目なのは飛鳥の特徴で
丸くなった顔と合わせて愛嬌を感じる。

瞳孔



時に細く、細く、鋭い瞳に見えるのは
瞳孔が縦長になるからで
飛鳥は細くなっても他の猫より太めなので
すました顔というものが見られない。



飛鳥の肉球

鼻と同じように黒とピンクのまだら模様だ。

ピンボケなのは、小心者の飛鳥が

足の裏を撮影しようとしたら逃げようとしたせいである。

ねるの！



飛鳥は「かまってちゃん」だが
猫らしく放っておいて欲しいときは
徹底的に無視しようとする。
それでも本気で怒らない辺りが甘えん坊なところで
こうして意地でも寝てやるという仕草をするのだ。

飛鳥について

20匹目といっても、飛鳥を迎えたときに20匹目だっただけで
それまで里親さんに貰われたり、早世してしまった子がいる。
飛鳥に出会うまで都心部の捨て猫ばかり見てきて
何かにとり付かれたように手元に置いてきたが
野良として山の中に生まれ
生きられなければ小さいうちに鳥に連れ去られる。
そんな中、母猫から離れたばかりの飛鳥に出会ったのだ。
獣医の健康診断でバツタなどを捕まえていたのだらうと
寄生虫から想像して告げられた山生まれの飛鳥。
飛ぶ鳥さえ落とすような猫に育てばいいと
出身地である明日香村の音をそのままに「飛鳥」と名付けた。
石舞台に居たのだから、もしかしたら
蘇我氏の所縁かもしれないなどと夢想してみる。
今年も、もうすぐ飛鳥に出会った彼岸花の咲く季節だ。
寒さを知らさず、冬を迎える前に連れ去ってきた。
暖かくなれば初めての妊娠をしたらろう。
そして生き残られなければ自然淘汰される世界に居たのが飛鳥だ。

人間の都合で捨てられた小さな仔猫ではなかった。
ただ観光地で人が大好きで甘えん坊な仔猫が
落ちている命を拾う悪癖のある私に見つかっただけの事なのだ。



二十分の一の猫

<http://p.booklog.jp/book/34689>

著者：猫屋雑猫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekoyazathuneko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34689>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34689>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.